

Sekula, Allan, “The Body and Archive,” Ed. Richard Bolton. *The Contest of Meaning*.

- the elaboration and unmasking of an un truth (344)
- Gaols Act of 1823 and the Metropolitan Police Acts of 1829 and 1839 が、警察の近代的制度化という点で先駆的で重要 (344)
- Directly to the point of the song, however, was a provision in the 1839 act for taking into custody vagrants, the homeless, and other offenders “whose name and residence [could] not be ascertained.” (344)
- 囚人の記録化は 1860 年代になるまで一般化しないが、司法写真的リアリズムは 1840 年代にその興りが見られる。 (344)
- ポートレート写真という、表彰的かつ抑圧的な表象のシステム (345)
- Thus photography came to establish and delimit the terrain of the *other*, to define both the *generalized look*—the typology—and the *contingent instance* of deviance and social pathology. (345)
- 鑑識写真 (criminal identification photographs) (346)
- 19 世紀半ばごろから、写真を社会規範に用いようとするベンサム的見解がすでに示されていた。例えば、Jane Welsh Carlyle は 1859 年に、写真に対する功利主義者的見解を示している。 (346)
- アメリカでは、功利主義的主張は、ポートレート写真家 Marcus Aurelius Root によって示され、彼は pleasure と discipline の結合を可能と考え、イメージに対する道徳的利用を説いた。労働者階級に対する家族写真的利用が文化的向上のみならず、国家の安定につながると主張。アメリカ思想史における家族規範の重要性が、その根幹にはある。Thus Root’s utilitarianism comes full circle. Beginning with cheaply affordable aesthetic pleasures and moral lessons, he ends up with photographic extension of that exemplary utilitarian social machine, the Panopticon. (346) (タフト、76にて言及)
- Especially in the United States, photography could sustain an imaginary mobility on this vertical scale (honorific-repressive, private-public), thus provoking both ambition and fear, and interpellating, in class terms, a characteristically “petit-bourgeois” subject. (347)
- *shadow archive*
- physiognomy and phrenology (347) 生理学、骨相学
- 生理学は、1770 年代後半に Johann Caspar Lavater によって制度化され、骨相学は、1900 年代にウィーンの内科医 Franz Josef Gall の研究に端緒を持ち、Gall の主張は 19 世紀半ばまで広く影響を持った。特にアメリカでは、写真の激増と骨相学には強い関係がある (347-348)
- 生理学、骨相学は資本主義における労働の分業の発達に貢献した (348)
- 1840 年代のアメリカで新聞の職業広告において骨相学の分析の提出を求める旨がある。 (348)
- とくに写真と骨相学の結合は、1846 年の“criminal jurisprudence”に確認される。改革主義

者で女性刑務所主任 Eliza Farnham は、受刑者の写真撮影をマシュー・ブレイディに依頼する——*Rational of Crime* として出版 (348-349)

- ・ファイリング・キャビネットの考察 (351)
- ・アーカイブ概念は、1850 年代後半に Oliver Wendell Holmes によって示唆される。目録的出ることを理想としつつも、ファイリングシステムが重要。 (352)
- ・犯罪学は蓋然的な犯罪者の身体を、犯罪科学は個別の犯罪者の身体を追う。 (353)
- ・初期マグショットの不完全性、1880 年代に発達、Alphonse Bertillon と Francis Galton による (353)
- ・ベルティヨンは、初めての近代的な犯罪識別システムを確立、個々のミクロな部分をマクロな記録の中に位置付ける。ゴルトンはポートレート写真を導入、犯罪者の系統に関心をもった。前者の実践は医学の分野で、後者の実践は公共保全の領域へと分化していく。ただし両者とも、警察機構とアーカイブの問題をシェアしており、その起源は、1830~40 年代の社会的統計学の隆盛およびそこでの「平均的人間」像に依拠する。これはベルギーの統計学者 Adolphe Quetelet によって創出された概念。オーギュスト・コンテとともに社会学の祖。ケトレーは、個々人の身体の平均値を求めることで平均的人間が見出されることを主張する。また彼にとっては、犯罪学がその最も代表的な領域であった。そして犯罪統計学は、都市生活における本質的な病理学的性格というブルジョワ的概念の流布に貢献したと主張される。 (353-355)
- ・a statistical fiction (353)
- ・平均的人間という概念は、社会的健全性だけでなく、社会の維持及び美という概念にも影響を与える。社会的規律を重視するとき、共和主義者と自称するケトレーのモデルは、ホーブスのリヴァイアサンと酷似する。 (355)
- ・19 世紀末までには、社会の可視的領域の本質主義的遺伝的モデルは棄却されつつあり、より包括的かつ組織的な抽象的モデルへと変換していたことが、フランスの社会学者 Gabriel Tarde の言説に見られる。1890 年にタルドは、犯罪責任能力の概念を社会共通性の領域内の個人的アイデンティティの連続性——貫した自己の概念のうえに打ち立てる (356)
- ・タルドのアプローチは、ベルティヨンの実践とパラレルである。“Bertillonage”、“signalistic notice”。犯罪捜査の効率性とシステム化を求めるベルティヨンの実践は、同時代のアメリカの現代的な工場管理法の提唱者 Frederick Winslow Taylor と共に通する。 (357)
- ・ベルティヨンは、写真をアーカイブ的に利用した初めての人物といえる。He clearly saw the photography as the final conclusive sign in the process of identification. Ultimately, it was the photographed face pulled the file that had to match the rephotographed face of the suspect, even if this final “photographic” proof was dependent upon a series of more abstract steps. (358-360)
- ・ベルティヨンは、犯罪者の身体を読み解可能なイメージ、言語テクストへと変換し、個あれは単に個人的な欲望というよりも当時の国際的な犯罪状況と関わる (361)

- ・1880 年代のフランスの農業危機が、都市への移住者を増加させたなど、当時の「再犯者」とは、浮浪者やアナキストを含めた社会脅威をすべて包摂するものであり、ベルティヨンのシステムはこれに応じていた (362)
- ・ベルティヨンシステムは、とくにアメリカで歓迎され、警察機構の子 k 差異化と標準化に貢献した一方、ゴルトンの指紋法と競合し、1910 年代後半にはそれに取って代わられながらも両者の混合も見られた (363)
 - ・the New York detective chief Thomas Byrnes published in 1886 a lavish “rogues’ gallery” entitled Professional Criminals of America. バーンズは、ベルティヨンほどではないものの写真を利用した人物(363)
 - ・ゴルトンは、遺伝研究に統計学を用いた第一人者でもある (365)
 - ・ゴルトンの思想が、ハインの児童労働の写真にも継承されている、と指摘 (371–372)
 - ・Eugenics was a utopian ideology, but it was a utopianism inspired and haunted by a sense of social decline and exhaustion. … Later, in the twentieth century, eugenics would operate with brutal certainty only in its negative mode, through the sterilization and extermination of the Other. (372)
 - ・the photographic problems encountered and “soloved” by Bertillon, the nominalist detective, and Galton, the essentialist biometrician? セクーラは、彼らの同時代人パースを参照し、記号の指示性と象徴性に言及、パースにとって写真は支持的で、言語表象が象徴的であるのに対して、ベルティヨンは写真を読むテキストに変換し、しかしそれは偶然的な身体の痕跡に過ぎず、ゴルトンは指示的な写真を象徴的なレベルに引き上げ、指示的な記号それ自体がひとつの意味を作用しえるものと捉えた。Despite their differences, both Bertillon and Galton were caught up in the attempt to preserve the value of an order, optical model of truth in a historical context in which abstract, statistical procedures seem to offer the high road to social truth and social control. (372-373)
 - ・ベルティヨンとゴルトンの両極的なアーカイブのシステムは、写真の記号的利用の両極をも示す。Bertillon sought to embed the photograph in the archive. Galton sought to embed the archive in the photographs.彼らがつくったのは、general parameters for the bureaucratic handling of visual documents. 写真史が警察機構という存在からいかに目を背けてきたか (373)
 - ・1880 年代から 1910 年代にアーカイブは写真をめぐる支配的な制度となった。写真のアーカイブの基準は、1876 年にアメリカ図書館司書 Melvil Dewey による十進法式の分類による。 (373–374)
 - ・議会図書館の読書室がパノプティコン的構造であり、ベルティヨンと議会図書館のキャビネットを造ったのが同じアメリカの会社。 (374)
 - ・The shadowy presence of the archive authenticated the truth claims made for individual photographs, especially within the emerging mass media. The authority of any particular syntagmatic configuration was underwritten by the encyclopedic authority of the archive. 例えば、Keystone Views や Underwood Underwood といった会社の存在なども。 (374)

- Can any connections be traced between the archival mode of photography and the emergence of photographic modernism. 例えば、1916年頃まで、プレモダニストとしてのPhoto-Secessionは、写真のシステム的利用に抵抗したが、1920年代には、アーカイブに対する複雑な言説が生じた。ザンダーはそれに肯定的であり、スティーグリッツやウェストンは否定的であった。 (374-375)
- エヴァンスは特に複雑である。一方でアーカイブ的モデルへの詩的抵抗として読める一方、一枚目のフォトスタジオの写真は対極に象徴的である。また、エヴァンスが警察写真への興味を持っていたことも知られている。Certainly Evan's subway photographs of the late 1930s and early 1940s are evidence of sophisticated dialogue with the empirical methods of the detective police. Evans styled himself as a flaneur and late in life likened his sensibility to that of Baudelaire. Though Walter Benjamin had proposed that "no matter what trail the flaneur may follow, every one will lead him to a crime," Evans avoided his final rendezvous. This final detour was explicitly described in a 1971 interview in which he took care to distinguish between his own "documentary style" and a "literal document" such as "a police photograph of murder scene." (375-376)
- Evans's sense of immutability of the existing social order. (376)
- アジェの写真へのカミーユ・レヒトの批評 (376)
- ベルティヨンは、国家の安全保障のレベルで、ゴルトンは、隆盛する右翼の本質主義的決定論の中で息づいている (377)
- These are political issues. As such their resonance can be heard in the aesthetic sphere. In the United States in the 1970s, a number of works, primarily in film and video, took an aggressive stance toward both biological determinism and the prerogatives of the police. 例えば Martha Rosler の The Vital Statistics of a Citizen, Simply Obtained (1976)、Howard Gray and Michael Alk の The Muder of Fred Hampton (1971)、Cinda Firestone の Attica (1973)、Pacific Street Film Collective の Red Squad (1972)
- Ernest Cole の House of Bondage (1967) (377)
- Theodor Adorno's remark "knowledge has not, like the state police, a rogue's gallery of its objects." (379)